自然災害とともに生きる時代

平成最後の「今年の漢字」は「災」であった。1月の草津白根山の火山噴火、6月の大阪府北部地震、7月の西日本の豪雨、8月の関西地方への台風直撃、9月の北海道胆振東部地震、とにかく多くの災害に見舞われた1年だった。

私の生まれ育った新潟市は、信濃川と阿賀野川の氾濫原として発達した新潟平野だけに、洪水氾濫等の被害を受けやすい土地である。加えて、活断層に囲まれた平野は地震の巣でもある。大学で地形や地質を専攻しようと思った時も、防災に携わる仕事に就こうと決めた時も、振り返ると、私の人生を動かしてきた場面には災害があった。

地球環境問題に取り組みたいと思って理学部の環境学科に進学した大学1年の夏「8月4日」、新潟では内水氾濫が起きた。朝起きて部屋のカーテンを開けると、家の前は川だった。一週間前に講義で習った「地図にない湖」の光景そのものである。床下浸水は免れたが車は壊れ、時間を追うごとに近所中の水が集まり、最後に排水されたのが我が家の前。どうやら我が家は近所の中でも最も標高が低かったようだ。この時に地形の高低差に強く興味を持った。幼い頃から東に五頭山地、西に角田・弥彦山地を望み、方角は山の形で知った。その間にはただただ低平な水田しかないと思って育ってきたが、そうではなかった。平野のなかにも、砂丘や自然堤防のわずかな高まりや、水田の高さが一段低い形で残る旧河道など、凸凹があることをこの年に学んだ。そして、新潟の古い遺跡は高まりを成す地形からきまって発掘されるとも習った。先人たちが自然の脅威から免れるために、より安全で住みやすい土地を選び続けてきたことを物語っているのだろう。そう思うと、地形は、自然災害とともに生きてきた人々の積み重ねてきた時間に感じられ、一気に私の興味の的になっていった。

それから数年、就職先を決めかねていた初夏「7月13日」、新潟はまた豪雨災害に遭った。途切れた河川堤防、茶色い泥水に押し流されていく家屋、テレビに映し出されるどの映像もそれまでの人生で見たことのないものだった。実家が被災した人も多く、学生は皆、自分に何ができるのかを考えたのだと思う。後輩たちの多くは土砂撤去のボランティアに行っていたが、私は大学の災害調査団に加えてもらうことにした。ヘルメットと長靴を身に着け、何度も現地に足を運んだ。この時の調査を通して感じた使命感が、防災に携わる仕事へと私を導いた。

災害現場は様々なことを教えてくれる貴重な場所である。この業界にいると、あの現場に行ったことがあるなど、ある種ステータスのように話す技術者も少なくないと思う。それだけ災害現場は新たな知見を教示してくれるからなのだろう。

私も就職してから災害調査に行かせてもらうことが何度かあった。しかし、何度行っても慣れる場所ではなく、私は災害現場が苦手である。しかも、災害調査はいつも悲しい。すべてが事後だからである。ただでさえ、被災地はマスコミにさらされ、ヘルメットを被った見知らぬ集団が、事が起きた後の現地を調査していく。どんな気持ちで耐えていらっしゃるのか、そんなことを先に考えてしまうのだ。もちろん学識高い先生が発生要因や発生実態を調査されるのは別である。新たな知見を指摘され、課題や対応方針について提言されることはとても重要なことである。しかし、私が災害調査に加わったところで、被災地からは学ぶことばかりで、地域に何を還元することができるのか、次の災害を一つでも防ぐことは果たしてできるのか、そんな気持ちに苛まれてしまう。

私の身近には災害が多いような気はしていたが、やはり気のせいではなかった。新婚旅行の申込みを済ませた直後の「2月22日」、ニュージーランドのクライストチャーチで地震が起きた。旅行先の変更を検討していると、今度は「3月11日」東日本大震災が発生した。私の人生にはやはり災害が多い。誕生日や結婚記念日と同じように、忘れられない災害発生日が年間に多くある。

新元号となる時代は、「今年の漢字」はなどと言わなくとも毎年、きっと世界中のあちこちで自然災害に見舞われるに違いない。私だけでなく、きっと誰もの身近になっていくに違いない。

いっそ強くなることをスローガンに掲げず、弱さを知り受け入れて、備えたり避けたりすることが重要なのだろうと思う。強く立ち向かうのが男らしいとすれば、備えたり避けたりすることは、むしろ女性向きかもしれない。業界にも増えてきた女性技術者の一人として、自然災害としなやかに向き合っていく方法を発信できるよう力を尽くしていけたらと思う。

櫻井（さくらい） 由起子（ゆきこ）
（朝日航洋株式会社）